

第 121 回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

本当に配慮できるのか

湯浅さんは、私たち全員が「配慮」の芽を持っているといいます。それは、先に述べた高校生の言葉の中にあるというのが理由だと言います。

「歩くのがちょっとゆっくりな人とは、自分もゆっくり歩くなりませんか。そういうことだと思うんです」

そう言われてみたら、誰でも、同じような経験をしているのではないかと思います。こうしているということは、そこにすでに配慮がありますし、そのための工夫もしているということです。相手に合わせて自分もゆっくり歩くということは、ともに歩むということを実践しているのです。つまり、共同性が成り立つということになると指摘しているのです。これならできると感じる人も多いのではないかと思います。当たり前だと答えることもできるでしょう。「障害のある人との共生」や「外国人の多文化を受け入れること」「高齢者への思いやり」などとということばを聞くと、何か決まった答えが求められているように感じる人もいるでしょう。倫理観の高い人でないといけないこととか、自分の世界からはかけ離れたものであるとか、聞けば、難しいものだと感じてしまっているのではないかと思います。

しかし、先ほど述べた高校生の答えのように考えると、ごく自然に受け入れられるのではないかと思います。「歩くのがちょっとゆっくりな人」に合わせて、ゆっくり寄り添って歩けばよいということなのです。歩くのがゆっくりな人というのは、障害のある人・外国籍・高齢者とは限りません。重い荷物を持っている人もそうかもしれません。靴ずれができている人もかもしれません。ゆっくり歩きたい人もかもしれません。つまり、相手が誰であったとしても、「歩くのがちょっとゆっくりな人」ならば、自分も少しペースを少し落として歩くだけのことだと湯浅さんは述べているのです。

ここで、重要なのは、家族旅行と同じで「納得解」だと湯浅さんは言います。

障害者だって高齢者だって、一人ひとり違います（それが多様性ということです）。障害があっても歩くのがやたらと速い人だっています。ここで大切なのは、その人との正解を、その人との間合いの中で、見つけることであると言うのです。それが「納得解」ということになるのだそうです。納得解は「相手の境遇やそこからの世界の見え方に関心を寄せ、それと自分を架橋すること（配慮）」によって生まれるからです。

でも、これはとてつもなく難しいことでしょう。納得解は簡単に得ることができないからです。提案しても提案しても受け入れられないことがあるからです。受け入れられない時に、相手の責任にしてしまったら終わりです。投げ出しても終わりです。「今度はどういう方法でやればいいのかと」考えて、否定されたら「また話し合っただう方法を考えればいい」と思い切れる人は、多くはないからです。多くの人は、そのめんどくささに耐えられないのです。しかし耐えられずに投げ出してしまえば、納得解には至らず、共同性は維持されないということになります。このめんどくささを乗り越えた先に見えるものを湯浅さんはラグビーの日本代表を例に出してまとめています。

2019年、ラグビー日本代表が目されたのは、多様性の典型のような構成のチームが「ワンチーム」としての共同性を維持し、力を発揮したからだろうということです。この時、私たちが感動したのは、多様性が共同性を獲得できたとき、そのパワーは均質的な共同性を上回ることを、私たちは目にしたからだということです。ラグビー日本代表は「勝つ」ために、そのめんどくささを乗り越えたということなのです。

そして、私たちは、地域と社会、そして世界の平和と持続可能性を実現するために、このめんどくささを乗り越えたいとむすんでいます。配慮ある多様性について、湯浅さんの文章を通して考えてきました。もう一度考えておきたいと思います。ゆっくり歩く人に合わせることはそんなに難しいことではありません。多様性を受け入れるということも同様なのです。ただ、納得解を得るために少し時間がかかるということでしょう。めんどくさがらずに、謙虚に優しく、そして、遠慮することなく周囲にいる多様な人たちと付き合っていきたいものですね。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。